希望をかなえる在宅医療

住み慣れた場所で暮らしたいという希望をかなえるため、市内の在宅医療を支えているのが田上佑輔（たのうえゆうすけ）医師です。田上医師が目指す在宅医療について話を聞きました。

やまと在宅診療所登米院長
田上 佑輔（たのうえ ゆうすけ）さん（39）

1980年、熊本県生まれ。05年東京大学医学部卒。東京大学附属病院腫瘍外科勤務を経て、東日本大震災がきっかけで13年にやまと在宅診療所を開設。現在は、東京、神奈川と宮城で在宅診療を展開している。

大切にしていることは患者と家族の思い

「最初に、患者さんや家族の希望、思いを聞いて、どういう医療が望ましいかを考えることから始めます。患者さんがやりたいことや、これからどう過ごしたいかという思いを大切にし、家族の不安や健康状態の相談に乗っています」。

そう話すのは、現在市内で約360人の患者を在宅で診療している、やまと在宅診療所登米の院長、田上医師です。在宅専門の診療所にした理由について「以前は、東京大学附属病院でがんの治療をしていましたが、患者さんが退院した後も、ずっと診てあげたいと思うようになったんです。そして、地方でも都市部と同じような在宅医療を受けられるような環境をつくりたいと考えました」と診療所の開設に込めた思いを話します。

「都市部では、がんなどの重症患者でも在宅医療が受けられ、緊急時の対応も可能です。市内の診療所の多くは、医師が一人で診療所内での診察と往診の両方をしているので、緊急時の対応などは難しい環境にあります。都市部のような在宅医療を提供するためには、チームで対応しなければなりません」と連携体制を構築しました。

24時間365日対応

現在、やまと在宅診療所登米には約30人の医師が勤務。24時間365日、いつでも対応できる体制になっています。田上医師が目指したのは、都市部と登米市で医師が行き来し、長期的に継続して在宅医療を提供するシステム。「地域医療に興味がある若い医師はたくさんいますが、地方に移住してずっと居続けるという医師はさらに少なくなると思います。いたとしても、その医師がいなくなった場合は、次の医師が来るまで住民はすごく不安になります。これからは、そうならないための仕組みが必要です」と、移住せずに医師が都市部と循環することで、医師不足の解消を目指しました。

コンセプトはオープンメディカルコミュニティ

田上医師がコンセプトに掲げているのが「オープンメディカルコミュニティ」という考え方です。「これからは、自分の終わり方を考える時代になり、最期まで自分らしく生活したいという人が増えます。その要望に応えていくためには、医師だけでなく患者を中心に、家族、看護師、薬剤師、栄養士、介護職、行政など、みんながチームとして関わることが大切。そして地域の人たちも関わり、互いに手助けや見守りをすることが、在宅医療を支えることになるのです」と地域内の関係が重要だと訴えます。

地域住民も含めたチームとしての在宅医療を確立するために、地域住民が医療や介護について話し合える場所が必要だと感じた田上医師は、コミュニティカフェ「coFFee doctors」をオープン。定期的に専門職の勉強会や市民講座を開催しています。「登米市民は、医療に関して課題意識は高いと感じますが、主体的に参加して良くしようとする意識はまだ低いと思います。学びの場を提供することで、地域住民と一緒に登米市の医療を考えていきたい」と将来を見つめています。

1 聴診器、血圧計や注射器などの医療器具を車に積み込む 2 心電図や超音波検査も自宅で対応可能 3 医師、看護師、アシスタントの３人で患者の待つ自宅に向かう 4 医師からの指示を受け、電子カルテに入力する 5 通常はカフェとして営業しているcoFFee doctors（迫町佐沼中江３丁目８番地１） 6 さまざまなテーマで月に１回程度開催される市民講座には、毎回多くの市民が参加している